

書 評

石 田 肇編

「痛 み」

——リハビリテーションにおけるアプローチ——

横浜市立大学リハビリテーション科 大 川 嗣 雄

痛みはリハビリテーション医学において重要な問題の一つである。というより、医学全体における重要な課題と言った方が良いのかもしれない。従って、痛みをコントロールし、和げるために、多くの方法が考えられ、用いられてきた。しかし、その中でもリハビリテーション医学の母体とも言うべき物理医学 (Physical Medicine) で用いられてきた種々の手段は、痛みを和げる目的のものも多かった。そこで、物理医学から発展してきたと考えられるリハビリテーション医学が痛みのコントロールに対して、相当な役割を期待されている事は当然の帰結であろう。さらに、物理医学が母体とは言っても、新しいリハビリテーション医学という立場からは、より積極的な治療すなわち、全人格的なアプローチがその基本的な姿勢であり、この考え方は古典的な物理療法より痛みに対してもより有効な手段になるはずである。これらの点は本書の冒頭にリハビリテーションにおける痛みの問題として佐々木によって簡潔ではあるが的確な指摘がなされている。このように考えてくると、日常の診療において、リハビリテーション医学の立場から痛みに対して適切な治療を行っているかどうかについては甚だ心許ないと感じるのは筆者だけであろうか。そのような点から

みると、この本はリハビリテーション医学の立場から、痛みの基礎から実際の臨床に至るまで、心を配って編まれたものだと考えられ、編者の御努力を先ず多としたい。

すでに述べたように、この本の冒頭には痛みとリハビリテーション医学の係り合いが述べられ、以後は3つの主要な部分から成り立っている。

第2の部分は、痛みの基礎知識として、痛みの生理、心理および対策が述べられている。これらの章のうち、生理、心理の章では、十分とは言えないまでも、現状での痛みに対する基礎がまとめられており、リハビリテーション医学の診療に当てる知識としてばかりでなく、より大きくリハビリテーション医学における痛みのコントロールを発展させたいと考える者にとっても必須の知識であろう。

さらに、痛みの対策は編者の石田によって著されているが、リハビリテーションの立場での明解な説明がなされている。中でも、痛みに対する方法の順序の説明は、痛みばかりでなく、リハビリテーションの全てに当てはまるものである。

第3部として、RA、脊髄損傷、変形性股関節症、切断、心疾患、脳卒中など、リハビリテーション医学に関係の深い疾患であり、かつ痛み

の対策に日常頭を痛める事の多いものがとりあげられている。それぞれの章は、痛みの発生メカニズムと対策を中心に述べられているが、特に発生メカニズムについては、専門的な考察がなされている。日常の診療の基盤として、これらの点を理解する事が大切であろう。

第4部には、痛みを主訴として、リハビリテーション医学に関係の深い、腰痛、頸腕痛、五十肩が第3部と同じように発生メカニズムと対策を中心に述べられている。第3部と第4部を通じて、リハビリテーション医学の日常の診療で遭遇するほとんどの問題が網羅されているといった感がある。痛みという問題をリハビリテーションの立場から、これだけ包括的に、しかも具体的にとりあげた類書を見ない。リハビリテーション医学を志す者はもちろん、痛みに関り合いを持つ者全てに目を通してもらいたい本である。

最後に編者も述べるように、この本が応用問題の解答を引き出すためのヒントとなり得るためには、各章ごとの文献の充実と選択基準の統一がよりなされればと願うものである。

B 5, 頁 220, 図 60, 写真 112, 1978,
¥4,000 〒200